

私たち羽犬塚ウイングスは、筑後市羽犬塚小学校をホームとし、坂口監督をはじめコーチ2名、部員30名で活動しています。練習は火曜・木曜日、土曜日曜日は試合を中心に暑さ寒さに負けずに日々頑張っています。「野球を楽しむこと」をモットーに一球一球を全力で取り組み、少年野球を通して体力の向上と礼儀正しさ、チームワークの大切さを学んでいきます。大きな夢を持って大空へ羽ばたけるように野球をプレーし、勝つことの喜び、負けることの悔しさを知り、その中でフェアプレー精神、忍耐、努力の大切さを共に学び練習に励んでいます。休日には多くの保護者の協力もあり、少しずつではありますが子供たちも成長しています。練習や試合の中で、対戦相手やチームメイトのプレーを見て勉強し、常に上を目指して努力し続けます。

「飛べ・羽ばたけ！羽犬塚ウイングス」

監督／坂口 三男 会長／溝上 秀範



## 楽しい仲間たち 羽犬塚ウイングス

中、来年こそは良い年でありますように。と、言いながら年末の行事である忘年釣り大会も楽しいうちに終わってしまつた(笑)。ただか数名のちっぽけな会だつたが楽しさはブライストレスであつた。♪

話は変わり、先の九州場所柳川出身の琴奨菊関が大関としての初場所を終え、当の本人周辺はもとより相撲ファン以外にも熱い声援を送られた方も多かったと思う。

### 国技と美食…?

#### 釣り

釈迦岳から御前岳を望む



### 矢部川源流・杣の里の四季 ⑦

釈迦・御前岳周辺ブナ林の霧氷・樹氷

樹木に花が咲いたように付着しているのは空から降ってきた雪ではなくて空気中の水蒸気が凝結してできた氷の結晶。つまり霧氷である。

霧氷とは、氷点下の環境で、空気中の過冷却水滴もしくは水蒸気が、樹木その他の地物に衝突して凍結もしくは昇華することのできる、白色や無色透明の水層の総称。

樹木についたものを特に樹氷という。福岡県の最高峰釈迦岳(1230m)、御前岳(1209m)周辺のブナ林では、雪が降らなくても冬季、気温が低い日に霧氷現象による樹氷で山の木々が白色に覆われることがある。樹氷によるこうした山の景色は、山全体を覆った雪景色と違って、枯れ木に花が咲いたようでまた違った趣がある。

(黒木町) 松尾重根

さぞや毎日押し潰されそうであつただろう、その重責…。残念ながら賜杯には届かなかつたが、私的には大満足であつた。敢闘賞でも贈つてあげたい気分だつた。

期待ほどプレッシャーになる要因はないと思うから。

ところで、九州場所といえは「ちゃんこ鍋」の中具材のメインは「アラ」である。標準名は「くえ」というが、関東では「モロコ」ともいう。隆盛を誇る部屋から順に大きな「アラ」を仕入れて力士たちに振る舞うのである。

部屋の勢いで仕入れる「アラ」の大きさが決まるといふ。それもその筈九州場所中の「アラ」の相場は通常の2倍近くになるとのこと。1kgあたり5000円、6000円がその倍になるといふからビックリである。

幸い私は釣りを趣味としており、稀に「アラ」にも巡りあえるが魚類のなかで一番の美味な魚だと思う。釣りをされない方々には縁遠い魚である。

ということ、今年の(夢)目標は大関・琴奨菊関に他部屋よりデカい「アラ」を差し入れる事になる。(汗)。ガンバリマス!!

磯の旅人

### 「イモ掘り交流会」

八女農業高等学校

10月13日三河保育所の園児と本校の生活科学科2年生が、イモ掘り交流会を行いました。サツマイモが土から顔を出すたびに園児から大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの交流会を通して、相手の目線に立って物事を考え、コミュニケーションの図り方を学ぶことができ、とても有意義な交流会となりました。

(生徒の感想紹介)

三河保育所のみんなと、私たちが育てたお芋を、一緒に掘る事ができて良かったです。みんな積極的にスコップで芋を探してくれて、見つけた時の喜びが可愛かったです。誰のが一番大きいお芋か競ったり、形がおもしろいのとかを見て笑っていて、何か素直でいいなと思いました。またいつでも遊びに来てください!!

(久富由実加)

私は園児と触れ合うことがあまりないので、どう接したらいいのか分からなかったのですが、小さくて笑顔がかわいい子ども達を見て、一緒に芋掘りをするのが楽しくなってきました。大きな芋を掘ると、子ども達はとても喜んでくれて、こっちまでうれしくなりました。機会があれば、また三河保育所のお友達と一緒に実習をしたいと思いました。

(藤妻温美)

(八女農みらい館) 1月の開館日

13日(金)、17日(火)、20日(金)、24日(火)、27日(金)、31日(火)  
毎週火曜日と金曜日の2回定期的に販売しており、販売時間は、10時30分～12時30分です。皆様のお越しをお待ちしています。



紙芝居風景



芋掘り体験

眩き

登る

二〇一二年の幕開け、初日の出は見えるだろうか。地元では「きよみつあん」と呼ばれ親しまれている清水山(標高三三〇m)へ、十年ぶりに夫と登る。初日を浴びに。

清水山の麓に車を停めて、約一時間かけて頂上まで歩いて登る。二十六歳になる長男が五歳の頃から続けてきた、わが家の行事だつた。後に二男、三男も加わり、家族五人ですつと続いていたわが

家の歴史の一部。暗い山道を懐中電灯を頼りにひたすら歩く。先頭を夫、最後尾を私で三人の息子達を間に挟むようにして歩く。日の出の時間を見計らい、声を掛け、励まし合いながら頂上を目指した。

息子達の成長と共に、この隊列は大きく崩れた。三人は競って頂上へ急ぎ、最後には走り出す。夫と私は年を追うごとに遅れ出す。一度頂上に着いた息子達が、再び下りて来て「お母さん、早く」と手を引いてくれた時の、無邪気な顔が忘れられない

蓉子

い。家族揃つての登山は二〇〇二年に終了し、頂上で撮った初日の出をバックの記念写真だけが残った。

五十歳を過ぎて、人生の下山の準備に入る時期。運悪く滑落しない様に、ゆっくりと時間をかけて山を下りる前に、十年のブランクを経て今、再び山へと登る。美しい初日をこの眼に焼き付けて、明日への力に変える為に。始まりと同じ、私達はまた二人になった。